

歴史のなかの女たち <第1回>

メンシア

伊藤 滋子

パラグアイの首都アスンシオンは、南米大陸南端のラプラタ河地方で最初のスペイン人の町である。なぜそんな内陸部に最初の町ができたのだろうか？それは、スペイン本国から送られてきて、ブエノスアイレスの建設に失敗した隊の生き残りがラプラタ河を遡り、グアラニ族に迎え容れられて、そこに腰を据えたからだ。スペイン人は現地の首長に倣って、ひとりひとりが何十人という女を持ち、続々と混血の子供が生まれ、そこは『まるでマホメットの楽園』といわれた。王室は現地にスペイン女性を送ってアスンシオンをスペイン人の町らしくしようと考え、折から派遣されることになった第三代目ラプラタ河地方長官にたいする命令書の中にこの任務を加えた。

そして、1550 年 4 月ラプラタ河地方に向かう 3 隻の船団には 50 人の女性が乗りこんでいた。ただでさえ華やかなこの出航がさらに人目を引くのは、首艦の最高部で手を振る指揮官がなんと 3 人の娘を連れた女性であることだ。メンシア・デ・サナブリア、まだ 30 代半ばの未亡人である。2 年前彼女の夫がラプラタ河地方第三代目の長官に任命され、彼女自身が出身地のエストレマドゥーラで同行する

女性を募った。集まったのはいずれも身元の確かな 50 人の女たちである。ところが出発を目前にして夫が急死、急遽彼女が隊を率いることになった。名目上の長官は 18 才の長男であったが、実際に指揮をとるのは彼女であることは明らかであった。長男は遅れて出発することになっていた。メンシアを補佐するのは最初にアスンシオンの町を築いた、現地経験も豊かなサラサールである。

航海に危険はつきもので、メンシアの船もご多聞にもれずフランスの海賊に襲われたが、海賊の方も大勢の女性をみて面喰らったのか、物品を略奪されただけで済んだ。しかし航海中にまだ幼い末娘が死んだ。8 ヶ月後ブラジルのサンタ・カタリーナの島に着いた時、彼女たちの船はもう使用に耐えないほどの傷みようで、別の 1 隻はとうとう着かなかった。かろうじて残った 1 隻で島と本土の間を往復して人や物を運んだが、この船も最後には岩に砕け、船長をはじめ数人が死ぬ。一行 120 人はそこから動けなくなってしまった。メンシアはサラサールと相談の上、到着を知らせて救援を求めるために、5 人の者を 2 千キロ内陸のアスンシオンに送った。実は使者は無事使命を果たし、川伝いに 2 隻の船が差

し向けられたのだが、隊を見つけることができないまま戻ってしまった。

さて海岸に孤立した一行は壊れた船の廃材を使って小型の船を造ることにした。幸い気候も良く、豊かな自然の恵みがあり食料にも不自由しない。まもなく、15 才になったメンシアの長女マリアは隊の若者と結婚、9 ヶ月後に子供が生まれる。当時のスペインのこと、いかなる隊にも神父の同行が義務付けられていたから、この隊にもふたりの神父がいて、毎日のミサや結婚式、洗礼もとどこおりなく行われていた。1 年後船が完成すると、王室との取り決めに従って、隊はなるべくポルトガル領に近い場所に移動し、町造りがはじまった。新大陸におけるスペインとポルトガルの国境は 1494 年のトルデシリャス条約によって決められていたが、ポルトガルはそれを無視し、領土を拡張し続けていた。危機感をおぼえたスペイン王室はメンシアに領土の確保を命じていたのである。

しかしサン・フランシスコと命名されたその町の創設は船を造るほど簡単ではない。釘その他の鉄製品や材木は船を作るのに使い果たし、畑に撒く種はなく、衣服はすりきれ、火薬も残り少ない。ときどき奇声をあげて襲撃をしかけてくる原住民トゥピ族は悩みの種であった。サラサールは種や火薬を買うために、船で近くのサン・ビセンテというポルトガル人の町へ出かけた。この時はじめてスペイン人の隊の存在を知ったその地の司令官ソウザは全員でサン・ビセンテに移ってくるように勧めた。メンシアは、後からくるはずの長男のためにもサン・フランシスコを確保しておきたかったが、女たちにいつまでも不自由な暮らしを強いるわけにはゆかず、しかも

赤ん坊までいるいま、そこを守り通す自信はない。そこで妥協案として、銃を持たせた兵士 4 人を残して形式的にはサン・フランシスコを領有したまま、隊を率いてサン・ビセンテに赴いた。

そこには彼女たちが初めて接する新大陸の文明があった。見渡す限り緑のサトウキビ畑、そこかしこで働く黒人やインディオの奴隷たち、美しい色に塗られた木の家、贅沢な調度品・・・司令官は彼女たちを肘掛け椅子に坐らせ、豪華な食事、ポルトガル産のワイン、音楽などでもてなした。この歓待に酔いしれた女たちはまるで天国にきた心地であった。しかしまもなく、聡明なメンシアはこの待遇がサン・フランシスコの建設を阻むための『金の檻』であることに気がついた。領土の拡張を図るポルトガルは、すぐそこにスペイン領の町を造られては困るのだ。メンシアは援助を拒絶し、一行を引き連れて、町外れの廃屋に移り住んだ。しかし司令官の支援なくしてはアスンシオンに向かうことも、スペインにこの状況を知らせることもできず、幽閉されたも同然となった。そんなところへ幸運にも、ひとりのドイツ人兵士がアスンシオンからヨーロッパへ帰ろうとしてやってきた。彼はメンシアとサラサールの手紙を銃身に隠して運び、スペイン王室に届けた。王室は彼女たちの無事を知って喜んだが、消息の絶えた隊を全滅したものと考えて、すでに新しい地方長官を任命してしまっていた。しかしポルトガル政府から通行許可書を取り、メンシアのもとに送った。本国からの通行許可書が届いた以上、ソウザもこれ以上メンシアを留

め置くことはできず、手厚く一行を送り出した。

サラサルはここで隊から離れてアスンシオンに向かう。メンシアは女性たちに、自分についてくるも、スペインに帰る船に乗るも好きにするようにといったが、全員が彼女に従った。1 年半ぶりサン・フランシスコに戻ってみると、目に飛びこんできたのは4つの頭蓋骨がトゥピ族の槍の先につき立てられて吹き晒されているおぞましい風景であった。それでも彼女は皆を勇気づけて、町の再建にとりかかったが、ある日突然、トゥピ族の激しい攻撃を受け、毒矢が雨のように降りかかってきて、多数の男が殺される。メンシアもはやこれまでと、2千キロを歩いてアスンシオンに行く決心をする。昼なお暗い原始林に道らしい道はなく、男たちが大鉈で切り開いたところを進むという困難な旅であった。しかもトゥピ族の襲撃や猛獣、毒蛇、虫さされと、密林のなかは危険だらけのうえ、疲労や熱病による死者もでた。それでも内陸のグ

アラニ族圏内に入れば、友好的な彼らの助けを得ることができ、旅も少しは楽になる。大河をカヌーに乗せて渡してくれたのも彼らであった。こうして5ヶ月の旅ののち、アスンシオンに入った一行は大歓迎を受けた。スペインを出て6年が経っていた。

そこで結婚した女性たちは夫の混血児を自分の子供とわけへだてなく教育し、『土地の息子』と呼ばれた彼らがこののちラプラタ河地方に次々と町を打ち立てていくことになる。母の腕に抱かれてアスンシオンに来たメンシアの孫はクリオリョ（現地生まれ）で最初の司教となり、のちに生まれたその弟がやはりクリオリョ最初のラプラタ河地方司令官となるエルナンダリアスである。かれは5期もその任務をつとめ、この地方の発展の礎を築いた人物である。

（いとう・しげこ）